

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

第3回 大学図書館員京都研究集会

アウトライン決定!!

と き 1994年11月13日(日) 10:00~

と ころ 同志社大学神学館

き ど せん 1,000円 たったの?!

め に ゆ ー 10時~12時 基調報告・質疑応答
13時~15時 実践報告
15時~16時 討論

基調報告者 **大城善盛氏** (同志社大学教授)

次ページに

関連記事

目次	第3回大学図書館員京都研究集会アウトライン決定.....	1頁
	来たれ、研究集会へ.....	2頁
	「私の『本』整理術」を読む(篠原俊夫).....	3頁
	全国大会(山口)断想(酒井忠志).....	6頁
	全国大会に参加して(一色俊也).....	7頁
	会費が千円値上げされました(竹本文夫).....	8頁

来たれ、研究集会へ

8月号の支部報で研究集会の内容や日程についてのアンケート結果を掲載させて頂きましたが、ご協力誠にありがとうございました。

その後、基調報告をお願いした大城善盛先生にご意見を頂き、アンケート結果も踏まえた上で支部委員会で論議いたしました。その結果、表紙でご紹介したようなプランがまとまりました。

日程は、アンケートでは希望は多くなかったのですが、日曜日を1日通しで行うことになりました。基調報告だけでも1時間半。更にこれを受けて実践報告から論議を深めるには、半日では到底無理だからです。

内容については、利用者教育の実践率が約37%という実態に鑑み、基本問題に焦点をあてたいと思います。まず、多くの大学図書館で講義内やオリエンテーション期間に実施されているガイダンスの実態と問題点を明らかにし、更に医学系図書館を例にカリキュラムに組み込まれている利用者教育の先進例について検証し、どうすればそこへ到達する可能性が開けるのかということの問題意識として設定したいと思います。

基調報告者の大城善盛先生は、アメリカの大学図書館の利用者教育についての動向にも精通しておられるので、その辺りの話も織り混ぜながら報告して頂けると思います。

また、実践報告では、4年制大学の中央図書館のガイダンスの実践例、教員によるガイダンスの実践例、図書館員によるゼミ別ガイダンスの実践例、医学系図書館のガイダンスの現在に至るまでの歴史的経過と実践例などの報告を予定しています。基調報告とあわせて充実した内容になると確信しています。ご期待下さい。

宣伝活動も精力的に行います。『図書館雑誌』と『大学の図書館』にも記事を掲載します。参加者もバラエティーに富んだ顔ぶれになると思います。決して参加して損はない研究集会になります。一人でも多くの皆さんの参加をお待ちしています。

◆基調報告者の利用者教育に関するプロフィール◆

『図書館における利用者教育』編集者

「米国の大学図書館における利用者教育の動向」執筆者

「大規模大学図書館における利用者教育の実態調査報告」学会報告

「私の『本』整理術」を読む

篠原 俊夫

自らスーパーエディターを名乗って精力的に出版に励んでいる安原顕の編集になる本がリテール・ブックス叢書として、1カ月に2冊のスピードで出版されている。この編集者は、他にメインの仕事として、リテールというタイトルの一見、売れそうもない書評専門誌をほとんど独力で編集・発行していることで知られている。そのリテール・ブックス叢書の最新刊の一冊に「私の『本』の整理術」(メタログ 1994年8月)がある。

多くの場合、本の整理術は、本の「不」整理術と同義であることは、私も経験上、よく分かっている。なぜ実用書としては、およそ有効性のない本書のようなものが、今更のように出版されるのか。意地悪くいえば、本の整理に失敗し途方にくれている人々に、本の整理に成功している人なぞありませんという安心感を与えるという効用のためかも知れない。職業柄と言えどもっともらしいが、多少はのぞき見趣味に近い気持ちもあって、この手の本は、もうたくさんと言いたくなるほど読んできたような気がする。とは言え、この本は、あらゆる意味でこれまで出版された類書を凌駕している。自分が読みたい本をつくるというのが、編集者の企画の原点だとすれば、自分が信頼できる力量のある執筆者をこれだけ大量に動員して、見事に読みたい本をつくってしまった安原顕は、編集者中の編集者であり、その手腕に素直に脱帽と言っておこう。

49人の執筆者と編集者自身もあとがきで、自己の蔵書論を披露しているから、執筆者の一人に数えれば、しめて50人丁度、すべて並はずれた蔵書家にして読書家であり、膨大な蔵書の整理になやんでいる人たちばかりである。この種の本から、整理のための実用的なアイデアをみつけたいと思う人も多いかも知れないが、私は体験的に、限られたスペースが許容する範囲を超えた蔵書は、いかなる手段を用いても整理は不可能という確信めいたものがあって、いまさら整理の妙手を発見しようという気持ちはない。それでも、この種の本が目にとまるとかならず買ってしまうのは何故だろう。職業意識に関連して言えば、一かどの研究者、もしくは文学者にして蔵書家と言える人たちは、なぜ揃いも揃って、図書館嫌いなのかという疑問に対する回答を見いだしたいという思いからである。しかし、本当の関心は別のところにある。研究者や文学者が苦心して編み出した、独自の情報収集とそれを用いた研究の方法論をのぞいて見たいと思うからである。言うまでもなく、蔵書や蒐書について語ることは、自己の発想や研究の方法を語ることである。だから、自己の蔵書を語ることは、精神の内部を覗きこまれるような気恥ずかしさが伴うはずだと思う。だからこそ、通り一遍のたてまえの蔵書談義でお茶を濁しておこうと思っていたのに、無意識のうちに本音の世界に移行して、洗いざらい極めて私的な蔵書への偏愛や羨望を語ってしまう人が多いのもよく分かる。

さて、肝心の本の内容についてであるが、私は自己の蔵書に依存する研究の限界を指摘し、大学図書館の充実を切実に願っているロシア・ポーランド文学を専門とする沼野充義に注目した。沼野はアメリカ留学を通じて経験した興味深い事実によって、自己の蔵書に対する思い込みを根本的に考えなおしている。その経験とは、アメリカ留学時代の恩師で

あったユーリー・シュトリーターとの出会いである。シュトリーターはヨーロッパの主要言語なら自由に読みこなせる大変な教養人であるにも拘らず、個人としての蔵書が意外に少なかったことである。シュトリーターは世界を転々と移動してきた経歴をもち、移動のたびに蔵書を整理したため、蔵書らしい蔵書を持ちえなかったにも拘らず、研究は大学図書館の蔵書を十分に使うことで立派に成立させていた。これは、アメリカの常識であっても、日本の若い研究者には驚きであった。もう一ヶ所、沼野の文章を引用してみる。

「日本ではろくな仕事をしていない三流の学者でさえも結構な蔵書を持っているのに、アメリカでは超一流の学者がろくに本を持っていない、などということがどうして起こるのか。それは、一言で言ってしまえば、欧米の大学の図書館が（大学外の人間にも開かれた）『民主的な制度』として機能しているからだと思う。例えば、何か新たなテーマを研究したくなったとする。そんなときは、何はともあれ、図書館に行って書棚から書棚へと駆け回れば数時間のうちに基本文献が集められる。後はそれを読破するだけだ。読む能力さえあれば、誰でもそうしてゼロから新しいテーマに挑戦することができる。もちろん借り出すこともできるが（ハーバードの場合、冊数制限などというケチなものはなかった）一流大学の図書館は連日深夜まで開いているのが普通だから、必ずしも家に持ち帰る必要はない。ところが、日本の場合、それほど信頼できる図書館はほとんどどこにもなく、それだけの図書館を作る予算がまずない。そして、そういった現状に甘んずる日本の学者は図書館の拡充に尽力する以前に、必要な本は自分で買ってしまふ傾向が強い。その背後にはおそらく『身銭を切って本を買い集めなければ、学問は身につかない』という迷信に近い考え方もあるのだろう。僕自身、人並み以上に金と時間を本のために浪費してきた人間だが、この種の不毛な精神主義はもうそろそろ断ち切るべきだと言いたい。」

ここには、図書館と蔵書と研究の関係について、新しいタイプの研究者の特徴的な考え方がよくあらわれている。アメリカに留学した経験のある研究者は例外なく、図書館の充実振りとそれと反比例するかのような研究者の個人蔵書の少なさに驚いている。書齋につきあげられた身銭を切って購入した膨大な個人蔵書の山が放つ異様な妖気のようなものに触発されて、研究上のすぐれた発見がうまれると根拠なく主張する研究者が多すぎるのである。沼野と同じようにアメリカの大学図書館を知ってから本に対する考え方が根本的に変わったという巽孝之の蔵書論、図書館論も沼野のそれに当然のことながら、共通するものがある。巽は、アメリカの大学図書館が学生等の必要とするテキストや参考書については、経費とスペースの負担を惜しまず必要な部数だけ購入しているのに、日本では学生に本を紹介しても一冊しかない図書が先に借り出されたら、もう利用できず結局、自分で購入するか、読むのをあきらめるしかない現状を慨嘆する。

「日本式大学図書館の常識で育つと、読みたい本というのはけっきょく買わなければならない本のことという公式をまぬがれない。いきおい、単行本はおろか学術雑誌に至るまで、私費で購入する運びとなる。（中略）アメリカでの教育はまったく逆に、書くために読むという堅固なまでの目的論的システムに貫かれた方式であるため、論文にとって必要なもの、コピーすべきものは何かを判定する選別眼を養うのに役立つ。何を買って読むのではなく、読んだものをどう使うか、それが問題である。」

比較文学を専門とする平川祐弘は、大切な本はやはり手元に置きたいとしつつも、自分が蔵書の形成に努力した駒場の東大教養学部の教養学科図書室の充実振りを誇って「この

教養学科図書室を利用する研究者の方が、外国語科図書室に依拠する教授たちより学問上の成果も上のように見受けるが、錯覚だろうか。」とまで言っている。日本の伝統的な研究者のスタイルを身につけてしまっている研究者にして、アメリカの大学図書館のすぐれた蔵書とサービス、それに依拠して敢えて個人の蔵書にこだわることなく、研究の成果をあげている教授たちの姿を見ては、自身の考えを訂正せざるを得なかったものと見える。

伝統的な個人蔵書中心の研究から、図書館の蔵書とサービスに依拠する新しいアメリカ型の研究に、研究のスタイルが変わりつつあり、今がその過渡期にあたりと考えていいのではなからうか。本当は、そんな時代は、一昔まえにすぎていると言い切ってしまう気がするのだが、それでは一向に変わったようには見えない日本の研究者の研究スタイルの説明がつかない。しかし、どんなに過渡期が長くとも変わるものは変わる。

かつては、父も祖父も学者一族という家系の中から、条件をみたく少数のエリート研究者が生まれた。しかし、取り立てて学問の系譜につらなる家の出自でなくとも、研究が好きでそこそこ成績がよければ、誰でも研究者になり得る時代は、必然的に個人蔵書依存型の研究者の終焉を意味することになる。家に財力はなく、受け継ぐべき蔵書もない、であれば彼の研究者としての蔵書と書齋は、大学や研究所の図書館に求めるほかはない。これは好むと好まざるとにかかわらず、これからの研究者を待ち受ける運命なのだ、と私なら断言したいところである。とは言え、図書館に理解を示す研究者は、止むをえずというものを含めても少数派である。試みに、本書に寄稿している名だたる蔵書家達の図書館への言及から、彼らの図書館に対する関心と評価を探ってみた。

49人中、多少とも図書館について言及し、消極的にせよ評価していると思える人は、多少ひいき目にみても、わずかに10人ほどである。残りの39人は、図書館に言及しなかったり、否定的な評価を与えているかのいずれかである。しかし、彼らもある時期、期待をもって図書館に出かけ、自己の期待と現実の落差の大きさに絶望して、個人蔵書の形成に向かったかも知れないという推測もできる。先に引用したように、日本の大学では、読みたい本というのは結局買わなければならない本だというのが異の図書館に対する現状把握である。殆どあきらめに近い感のある図書館についての認識を、図書館員として、どう思うかと問われれば、日本の大学図書館の実情を十把ひとからげで論ずることには無理があるにしても大筋であっていると思う。大学図書館の現状にたいする不信から生まれた個人蔵書への過度な依存は、学問的テーマが広がり、深まるなかで、必然的に個人の財政負担能力への悲惨な挑戦につながる。日本の研究者がそれほどゆたかであるわけがない。個人の財政負担能力を超えた時点で、早晚、破綻することは目に見えている。

残された道はひとつしかない。アメリカの一流の大学図書館の水準を日本の大学図書館が達成できれば、半分は強がりとして自己満足にすぎない蔵書論や蒐書論は、なくなるはずだと言える。

この本に整理のための実用書を期待する人は多分失望することになる。しかし、超人的な蒐書家たちの秘密めいた心の奥底をのぞきみたいとおもうひとの期待をうらぎることはないと思う。

(しのはら・としお／京都大学法学部図書室)

全国大会（山口）断想

酒井 忠志

大図研の大会に参加するのは3年ぶりであった。旧常任委員の皆さんの元気な顔に会えるのが楽しいし、大図研は、今はどんな問題に取り組んで頑張っているのだろうか、そんなことを見せてもらうのも、また楽しい。山頭火のユーモラスな、かつ禅味のある句碑を是非一度は見たいと思っていた、そんな宿願も果せる。現場を離れて丸3年を経ているから、もう皆さんの役には立てないけれどと考えながら、のこのこと湯田温泉へ出かけていった。

出かける前に、予備知識として『大学の図書館』7月号を一通り読んでみたが、内容によくわからない点がある。その原因は学審部会報告を見ていないことにあると思って、慌てて全文を探したが、現職でない悲しさ、すぐには手に入らない（むかし京大を退職された岩猿先生が、現職を離れると情報が入らない、と言われたことを思い出したが、本当である）。仕方がないから、『学術月報』の要旨をコピーして泥縄式に一読した。

大会会場で配られた大図研大会名物『資料集』にはチャンといの一番にその全文が載せてあった。当然とは言え流石である（ただし、表と裏が上下を逆さまに印刷されていて読みづらかった。最近はこのながの流行っているのだろうか）。この文書を詳しく吟味すれば、相当面白い結果を得られるだろうし、もしかしたら、大図研運動の画期的な展開をもたらす新方針を導き出すことができるかもしれない。そんな期待を抱きながら、全体会の発言を聞いていた。しかしながら、私の記憶の中には、そのでの議論は全く残っていない。私がしばしば中座して私的喫煙タイムをとっていたので、あるいはその間に大事な討論があったのかも知れない。それならば責任は私にあり、自業自得と言うべきである。結局、私には大会議案の「ガイドライン改訂に生かす」という一文だけが残った。

全体会では、その他に二三の注目すべき議論があった。ここで詳しくは触れないが、それは、情勢分析のなかの「組合」的文言の削除意見、専門職問題、会費値上げ問題等である。いずれも大図研の運動の進め方、組織原則にかかわる大切な問題である。時間をかけてじっくり検討していただきたいものである。

以上のように書くと、なんだか不満たらしく聞こえるかもしれないが、決してそうではない。無責任な立場から気楽にものを言わせてもらっているだけである。実際は、したたかに呑んでしたたかに酔い、前後不覚にしゃべりまくって大いに愉快であった（傍迷惑はお許し願いたい）。また、山口支部の受入態勢は実に見事で見事完璧であった。とりわけ、字幕、ポスター、速報等にちりばめられた巧みなイラストには感心した。

念願の山頭火の句碑にもお目にかかったが、こちらの方は石があまりにも堂々と立派すぎて、いささか閉口した。藤津さんの言によれば、観光協会がやることだから仕方がないとのことである。そういうものなのかも知れないが、冥途の山頭火先生はお困りではあるまいか。

せっかく山口まで来たのだから故藤田善一さんのお墓に参りたいと思い、下関まで足を伸ばした。奥さんと思ひ出話をしながら、大図研の会員でもあった藤田さんだから、生き

ておられたら、この大会にも参加されたらだろうにと考えていた。

(さかい・ただし)

【第25回大学図書館問題研究会全国大会参加レポート②】

全国大会に参加して

一色 俊也

一昨年に初めて全国大会に参加し、今回で2回目の参加となり、会員になって初めての参加になりました。一昨年時はまだ図書館で働きだして（社会にでで）まだ1年半ぐらいしかたっていませんでしたので、右も左も分からず参加者の発表や意見を聞いてただ感心するばかりでした。今年は働いて4年目になっていましたが、あまり成長のあとがみられなくて今回も参加者の発言や図書館に対する姿勢をみて感心するだけで、まだまだ話し合いに積極的に参加することはできませんでした。私事都合により課題別分科会（8月28日）のみの参加でしたが、まずこの内容から書きたいと思います。

午前中は第5分科会”目録とOPAC”に参加しました。前半に”大学図書館における目録評価の意義とあり方”のレポート発表があり、後半に意見交換が行われました。レポートは、まず大学における自己点検・評価の背景・現状・意義の解説があり、その後大学図書館における目録の評価の解説がありました。意見交換では、各大学の自己点検・評価の様子や、電算化、OPACの様子、利点と欠点などの話し合いがおこなわれました。まだ、本学（京都府立大学）では電算化がまだなされて無く、自己点検・評価も今年”京都府立大学白書”ができ、その中に附属図書館の項目もありましたが、係長クラス以上の方が中心となってやってられたので、話としては興味をもって聞けましたが実感としてはあまりピンとはきませんでした。また、図書館のコンピューターシステムに関する勉強不足のために、少し専門的な言葉がでてくるとその単語の意味が分からないこともしばしばありました。しかし、近い(?)将来、本学の図書館も時代の流れから電算化はなされると思います（期待します）ので、その時は、まずコンピューターシステムを勉強してから（その時までには勉強しておかなければいけないですが）、この分科会の資料やメモに目を通すとたいへん参考になると思います。

午後は第6分科会”資料の保存と廃棄”に参加しました。これも前半はレポート発表、後半は意見交換という形で行われました。レポートは、法政大学大原社会問題研究所における資料保存についてで、資料の劣化状況調査の状況や劣化を抑え現在と将来にわたって利用を保障するための取り組みについて発表されました。意見交換は、レポートをうけて劣化資料対策の問題に加えて、書庫のパンクにともなう分担保存の問題や廃棄の問題について話し合いがおこなわれました。本学では、劣化資料対策はまだ何もしてませんが書庫パンクの問題は深刻で、他大学の方の話も同じように劣化対策はしていないが書庫はパンクして困っているというのが多くありました。それにより、劣化資料対策の困難さと書庫のパンク問題の深さがよく分かりました。また、劣化対策もされていて、書庫のパンクの問題についてもきちんと対策をされている（廃棄基準をもうける等）大学もありましたの

で、少しでもこの大学に近づけるようにしていきたいと思いました。この分科会は今現実に直面している問題についてでしたので、ここで学んだことをすぐにできることから実行していきたいと思います。

前述の通り1日だけのあわただしい参加でしたので、全体の雰囲気というのはあまり分かりませんでした。内容が濃い充実した1日になりました。一昨年は課題別分科会が午前・午後とも同じでしたが、今年は午前・午後と別の分科会になりましたので、2つの分科会に参加できるという利点はありましたが、もうひとつ突っ込んだ話し合いができなかった(レポート発表と自己紹介を兼ねた各大学の事例紹介で半分以上の時間がとられた)ようにも思われました。しかし、参加されている方(ほとんどが先輩)の図書館に対する熱意と知識は十分伝わってきました。だから、まだ若輩者の自分としては少しでもこの熱意と知識を身につけて、参加されていた方々に少しでも近づけるようにしたいと思いました。これからも、全国大会だけでなく、こういう研究会があればできる限り参加をして、自分自信に刺激を与えて少しづつでも何かを身につけていきたいと思います。

(いっしき・としや/京都府立大学附属図書館)

会費が千円値上げされました

全国委員 竹本文夫

この夏山口の湯田温泉で開かれた第25回大会で従来4千円だった会費が、千円値上げされ、5千円とすることが決定されました。その結果京都支部の皆さんは、支部費千円を加えた6千円を納入して頂かなくてはならないことになりました。

この会費値上げ問題は、実に過去2年間にわたって全国委員会で論議され、もみにもんだ末やっと今年6月の全国委員会で大会へ提案することが了承されました。値上げの理由は諸経費の高騰です。さらに一般的な物価上昇だけでなく、常任が関東へ移行した結果、関東の諸経費が関西よりも高いという地域的な事情もあります。

特に東京の印刷費は関西にくらべ倍くらい高く一時は常任から機関紙『大学の図書館』の月刊維持が財政上出来ないので了解してほしいという提案があったくらいです。この問題は、京都支部の提案により機関紙の印刷を京都で行なうことにして何とかきりぬけました。しかし、原稿の送付、校正の往復、現物送付等費用が余分にかかるので、東京に比べると随分安くはなりましたが、関西に常任があったときと比較すれば、やはり割高になっています。

経費節減につとめ、出版部財政からかなりの金額を一般財政に繰り入れ、さらに数十万を借り入れ、その上個人からまで借金するなどして何とか会費を据え置いたままここ何年か遣り繰りしてきました。しかし、こうした遣り繰りも今年1月からの郵便料値上げの直撃でついに限界となり、全国委員として2年間抵抗してきましたが、値上げを認めざるをえなくなりました。全国大会では満場一致で承認されました。

以上の諸状況、経過をご理解いただき、1994年度会費5千円、支部費1千円、計6千円をこの秋に納入して下さるよう心からお願い申し上げます。